

第2部 パネルディスカッション

「部活動地域展開が作る新たな価値と可能性とは」 パネリスト発言要旨

1. 開会と趣旨説明

司会：皆様、お待たせいたしました。それでは、パネルディスカッションを始めさせていただきます。本日は「部活動地域展開が作る新たな価値と可能性とは」というテーマで、パネルディスカッションを行います。

岸田：皆様、改めましてこんにちは。本日のコーディネーターを務めさせていただきます、ASハリマアルビオンの岸田です。本日のテーマは「姫カツ」です。これを単なる部活動の地域展開という話だけではなく、少子化が進む中でも学校部活動が担ってきた教育的意義をどのように継承し、発展させていけたらいいのか。姫路の子どもたちが継続的にスポーツ、文化、芸術活動の将来をどうデザインできるだろうか、という話し合いを5人のパネラーの皆様と重ねてまいります。これを「経営改革会議」として、皆様と一緒に進めていきたいと思えます。

2. 姫路市における部活動の現状

岸田：田淵課長、今の姫路市内の部活動の状況を教えていただけますでしょうか。

田淵：姫路市の学校部活動の現状について、簡単にご説明いたします。姫路市の中学生はおおむね13,400人程度の生徒がおります。その中で学校部活動に加入しているのは80%強です。ただ、学校による部活動の選択肢の格差というのが課題です。大規模校では運動部だけで15種目ほどから選択できますが、小規模校では5～6種目の中からしか選択できないというような、学校による選択肢の幅の違いが出てきています。

また、生徒数の減少に伴い、学級数が減り、教職員数も減ります。その結果、部活動の顧問を担える教員数が減り、部活動を廃止せざるを得ない現状がございます。指導面でも、自分の専門種目を指導している先生と、専門外の先生の比率は50%ずつです。生徒の立場から見ると、半分の生徒が専門的な指導を受けられていないという課題もございます。

3. 保護者と現場の視点

岸田： 田淵課長、ありがとうございました。それではここで、保護者を代表して岡崎さん。これら今の報告を受けて、肌で感じることはございますでしょうか。

岡崎： 実際、部員数の減少には少子化の影響を強く感じています。2000 年頃と比較すると、中学生の数は 4～5 割ほど減少しているのが事実です。姫路市は南北での地域格差も大きく、学校単位での維持の限界、そして教育課題の高度化・複雑化による教職員の負担増が進んでいると感じます。保護者の声としては、人数不足による活動休止や廃部への不安、また顧問の先生を配置できずに入部停止になるケースもあり、「部活動がなくなるのではないか」という切実な不安を抱えていらっしゃいます。

岸田： ありがとうございます。続いて井上監督。田淵課長による現状報告を受けて、現場サイド、またご自身の選手時代の感覚も含めてお聞かせいただけますか。

井上： 私が中学生の時より、やはりチーム数も減っていますし、1 チームに所属する選手の数も少なくなっている印象です。姫路市はバレーボールが非常に盛んな地域で、特に小学生の競技人口は日本一と言われていましたが、データによると 2015 年に 32 チームあったのが、2025 年には 13 チームまで減っています。小学生の段階からチーム数の減少が顕著に表れています。

4. 先行事例：福知山ユナイテッドの取り組み

岸田： そうですね。そのような中で、既に先行的に部活動改革に取り組んでいらっしゃいます、福知山ユナイテッドの片野さん、運営状況などについてご説明をお願いいたします。

片野： 僕は地元である福知山でクラブを立ち上げて 3 年半ほどになります。特徴の一つは体制です。僕の下に理事が 5 人おりますが、そのうち 3 人は中学校の現役の先生です。一般社団法人という民間組織の理事に先生が入ることで、新しい地域展開の形を表現しています。2 つ目の特徴は「ビジネス機能」を置いている点です。元教員で「クラブで働きたい」と転職してきたスタッフが、指導と営業を兼務しています。「持続可能」であるためには、受け皿となる地域クラブ側が「稼ぐ力」を持ち、自立して環境を作る覚悟が必要です。我々は現在、助成金や補助金に頼らず運営しています。

福知山市は人口約 7.5 万人、中学生約 2,000 人と姫路市より規模は小さいですが、課題は共通しています。男子バレー部は市内で消滅し、野球の少年団も 40 チームから 11～12 チームまで減りました。我々は、中学生だけでなく、幼稚園から小学校までの受け皿も用意しています。例えば「バルシューレ」というボール運動プログラムを通じて、早期の専門化による怪我や燃え尽き症候群を防ぎ、スポーツの入り口作りから取り組んでいます。

5. 公民館との連携と現状

岸田： 独立自走されている素晴らしいアイデアですね。続いて、地域に根差した交流の場である公民館との連携について、長谷川館長、中学生の利用状況はいかがでしょう。

長谷川： 姫路市には 68 の公民館があり、昨年度の延べ利用者数は約 80 万人です。そのうち中学生の利用者は約 1 万 1,000 人で、全体の 1.4% に留まっています。無料 Wi-Fi の整備や自習室の開放により、前年度の 1.1% からは微増しましたが、小学生の利用率（9%）に比べるとかなり少ないです。土日に中学生向けの講座を企画しても、「部活や塾で忙しい」という理由でほとんど申し込みがありません。現状、公民館は「元気な高齢者が集う場所」というイメージが強く、中学生にとっては自分たちが行く場所ではないという心理的ハードルがあるのかもしれません。

6. 保護者の本音と 5 つの懸念

岸田： それではここからが本題です。保護者が抱える本音を、岡崎さん、ぜひぶつけてください。

岡崎： はい、ありがとうございます。多くの保護者から寄せられた不安や疑問の中から、特に重要な 5 点をピックアップしました。

費用の問題： 地域展開により、年額で約 4 万円、3 年間で 12 万円以上の負担が生じます。兄弟がいればその倍です。物価高や塾代の負担がある中で、この会費は家計を圧迫します。行政だけでなく民間企業のスポンサー支援など、負担を軽減する施策を強く求めます。

送迎の負担： 共働き世帯が多い中、他校区への送迎が必須となると、仕事への影響や、送迎ができない家庭の子どもが活動を諦めざるを得ない状況が懸念されます。「送迎を必要としない仕組み」の検討が必要です。

情報発信の一元化： 現在、情報が複数のサイトに点在しており分かりにくいです。競技ごとの詳細（場所・時間帯など）を含め、一気通貫で確認できる仕組みが欲しいです。

活動に参加しない生徒への対応： 費用や送迎の問題で参加しない子どもたちが、放課後の居場所を失い、学習意欲の低下などに繋がらないか心配です。学校と教育委員会の情報共有を密にし、歩調を合わせていただきたいと思います。

学校から切り離すことへの疑問： 「指導員を学校に派遣する形ではダメなのか」という声もあります。部活動が学校にあることが登校のモチベーションになっている子もいます。学校との繋がりを維持した形での改革も検討していただきたいと思います。

7. 不安を期待に変えるために

岸田： 熱いご意見ありがとうございます。片野さん、これら耳の痛い意見に対し、福知山での事例はどうですか。

片野： 岡崎さんのおっしゃることはよく理解できます。福知山では、まず企業スポンサーを立ち上げ当初から募り、現在 120 社ほどまで増えました。これにより会費を抑える工夫をしています。送迎については、スクールバスの利活用を検討していますが、条例の壁（学校教育以外での使用制限）があるため、今後の連携課題です。情報発信については、全競技の指導者に SNS アカウントを持たせ、競技ごとに発信することで、当事者に直接届くようにしています。

岸田： 田淵課長、行政としての見解はいかがでしょうか。

田淵： 保護者の不安は重々承知しており、制度設計の重要課題として検討しています。一方で、子どもたちのニーズとの「ズレ」も認識する必要があります。アンケートでは、部活動にない種目（ダンスやeスポーツ等）への関心が高く、また「仲間と気軽に楽しみたい」「活動は週3日程度が良い」という声も多いです。こうした多様なニーズに応えるには、学校の枠を超えた地域展開が必要だと考えています。

8. 未来展望：5年後の「姫カツ」が作る価値

岸田： それでは最後に、パネラーの皆様に「5 年後の姫カツが作る価値」をフリップに書いていただきました。

井上： 『人とのつながり』。プロ選手や地域の人との交流が子どもたちのモチベーションになります。

片野： 『当たり前改革』。学校単位という固定観念を、地域全体で子どもを育てる「新しい当たり前」に変えていきたい。

岡崎： 『生徒と保護者の納得感』。主役である子どもと、支える親が納得できる改革であってほしい。

長谷川： 『ええ出会い（A-DE-AI）』。AI（人工知能）の時代だからこそ、地域の人や仲間とのリアルな「ええ出会い」が自己肯定感を高め、愛を育みます。

田淵： 『ワクワクするもの』。オール姫路で、子どもたちが「中学に入ったら何に入ろうか

な」とワクワクするような、多様な選択肢のある環境を作りたい。

岸田： 皆様、ありがとうございました。今日の議論を種まきとし、5 年後にさらにワクワクが増大していることを願っております。本日は誠にありがとうございました。